様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１３日現在

機関番号：８０１０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０２３６
研究課題名（和文）　聴き取りと物質文化資料の調査による日本列島北方域の交易変容に関する包括的研究
研究課題名（英文）Comprehensive studies on the change of trade acivities in the northern region of Japan archipelago by interviews and survey on material culture and artifacts.
研究代表者
東　俊佑（AZUMA SHUNSUKE）
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：30370224

研究成果の概要（和文）：本研究では、サハリン島北部ネクラソフカに住むニヴフの方がたに対し、次の２つの調査をおこなった。(1)ロシア沿海地方との交易活動に関する聴き取り調査、(2)交易に関する物質文化資料の調査。その結果、大陸とサハリン島の間の住民間の交易活動は、20世紀中ごろまでおこなわれていたことがわかった。また、その交易は、19世紀中ごろ以前までおこなわれていた交易活動とは形態の異なる交易だったことも明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In this research, I investigated the following two to Nivkhi which lives in the Nekrasovka in northern Sakhalin. (1) Interviews on the trade activities with Russian Coastal Regions, (2) Survey on their material culture and artifacts about trade activities. As a result, it turned out that trade activities of the residents between Russian Coastal Regions and Sakhalin were performed till the middle of the 20th century. Morever, it turned out the difference from trade activities were performed till the middle of the 19th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,000,000	600,000	3,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・歴史一般
キーワード：日本史、文化人類学、民族学

１．研究開始当初の背景

(1)〈地域〉への関心

1980年代以降における歴史研究の特徴の一つは、日本史、中国史、ロシア史といった一国史にとらわれず、国境をまたいだ〈地域〉を対象としたことであった。日本列島北方域においては、アムール川下流域とサハリン（樺太）を横断する人びと（現在のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ、ウリチ等の北方諸民族）の交易活動に注目が集まった。この交易は、諸民族間の単なる私的取引ではなく、それぞれの背後にいる日本や中国の影響を強く受けたものであった。18世紀以降、中国（清朝）は、アムール・サハリンへの支配を強め、サハリンの北緯48度以北の住民に、朝貢を義務づけるにいたった（辺民制度、貢貂賞烏林制度）。一方、18世紀末、日本はサハリン南部へ進出し、19世紀初頭には、毎年アムール川下流域からサハリンサハリン南端へ渡来する「サンタン人」との交易を独占するにいたっ

た。松前・蝦夷地では、北方経由で渡来する絹織物を「蝦夷錦」と呼ぶが、これは清朝がアムール川下流・サハリン住民へ下賜した中国江南地方産の宮廷服飾生地であった。これに対し、「サンタン人」等が清朝へ献上した毛皮は、サハリンや北海道産のテン等の小動物の毛皮であった。すなわち、北方諸民族を媒介として、日本と中国は、交易関係を保持していたのである。

(2)「サンタン交易」の研究動向

以上のような研究は、文化人類学の視点から佐々木史郎氏(『北方から来た交易民－絹と毛皮とサンタン人－』日本放送協会、1996年)、東洋史・満洲語文書から松浦茂氏(『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学出版会、2007年)を中心に進められた。また、こうした日本での研究動向に触発され、現在は、中国やロシアの研究者も、アムール川下流・サハリン諸民族の歴史・文化に強い関心を持っている。筆者の勤務する北海道開拓記念館では、1990年以降「北方文化共同研究事業」を立ち上げ、北方諸民族の歴史・文化に関する調査研究を現在まで継続的に行ってきた。筆者もこの事業に参画し、間宮林蔵の残した記録や「箱館奉行所文書」といった日本側の原史料(翻刻・活字化されていない毛筆くずし字文書)を用いて、日本史の立場から幕末期の「サンタン交易」の実態解明に努めてきた。しかし、研究をすすめる過程において、文献資料からのアプローチの限界を感じるにいたった。

(3)聴き取り調査、物質文化資料調査の必要性

筆者は、2007年9月にロシアサハリン州、2009年8月には中国黒竜江省をそれぞれ2週間ほど調査する機会を得た。そこで、従来の通説的理解とは異なる事実が明らかとなった。

「サンタン交易」は、19世紀中ごろにおける日本の江戸幕府の崩壊、露清間の北京条約の成立によるアムール下流域からの清朝の撤退によって、消滅したと考えられている。しかし、ニヴフやウイルタの古老の話を聴くと、サンタン人や満洲人は、20世紀にいたってもサハリンに渡来し、交易を行っていたというのである。また、サンタン人・満洲人が北方諸民族に交易品としてもたらしたとされる真鍮製の飾り物が、サハリン州内に多数残存しているが、調査の結果、ソ連時代のコペイカを用いた物も確認できた。このことは清朝崩壊後も、ロシア・ソ連が関与する形で、北方諸民族間の交易が行われていたことを示している。こうした事実に直面すると、日本で文献資料のみに依拠した研究を行うだけでは、何も明らかにすることができない。改めて、聴き取りと物質文化資料の調査の必要性を痛感するに至った。

一方、中国黒竜江省調査で気づいたのは、「蝦夷錦」と清朝役人の官服との相違である。従来の通説では、「蝦夷錦」は清朝の官服であり、北方諸民族を媒介として、中国から日本へ流れた交易品と理解されている。しかし、両者を比較すると、意匠や文様、仕立て方が明らかに異なることがわかる。中国人研究者によると、清の皇帝や上級官僚にしか着用・所持が許されない龍や牡丹の文様の入った絹織物が、黒龍江(アムール川)下流、日本へ流出している事実自体が定説外のことと言う。このことは、黒龍江下流の住民に下賜するための専用の絹織物が作製された可能性を示すものである。日本における「蝦夷錦」研究は、所在調査や年代分析に留まっており、中国服飾研究や清代官制史の成果を視野に入れて、文様の意味を解釈するには至っていない。

以上のような問題意識は、筆者の勤務する職場の文化交流事業のなかで得られた視点である。限られた時間と制約のなかでの調査だったため、まだ断片的な情報からの仮説の段階に留まっている。したがって、具体的なフィールド調査により、それを裏付けていくことが必要と考えるに至った。以上が本研究の着想経緯である。

２．研究の目的

本研究の目的は、19世紀中ごろ以降（主として1870～1945年）における日本列島北方域（アムール川下流域、サハリン）のアイヌ、ニヴフ、ウリチ等諸民族の交易活動（19世紀中ごろ以前において「サンタン交易」と呼ばれていた交易）の実態を解明することである。通説において、「サンタン交易」は、19世紀中ごろの江戸幕府の崩壊、露清間の北京条約成立によるアムール川下流域からの清朝の撤退によって、消滅したと考えられている。しかし、筆者

が近年に収集・調査した文献資料以外の口述・物質文化（モノ）資料は、20世紀に至っても、交易が継続していたことを示している。したがって、古老からの聴き取り調査、博物館等における物質文化資料の本格的な調査により、文献資料だけではわからない交易の空白部分を埋めることができるはずである。

本研究では、サハリン島北部ネクラソフカに住むニヴフの方がたからの聴き取り調査による音声資料の集積、「蝦夷錦」や真鍮製飾り等の物質文化資料の所在の把握と写真撮影による画像データの集積を具体的に実施する。これにより20世紀の交易の状況が明らかになり、先行研究で明らかにされている17～19世紀初頭の交易の状況、筆者が検討した1850～60年代（日本史でいう幕末期）の状況との比較検討が可能となる。

３．研究の方法

(1)事前調査

筆者の勤務先である北海道開拓記念館が過去に実施した展示会『山丹交易と蝦夷錦』や『北方民族資料展』の展示図録、その際の準備調査資料や写真をベースに、日本国内の物質文化資料に関するデータを整理した。

また、2007年にノグリキ市歴史博物館で調査した物質文化資料（とくに金属製飾り）の写真データの整理をおこなった。

(2)サハリン実地調査

サハリン州北部・オハ地区のネクラソフカにおいて、2011年2月13～15日の3日間実地調査をおこなった（移動日等を含めた全体の調査日程は9～19日）。実地調査では、ニヴフの話者（インフォーマント）の方（女性4名と男性1名）からの聴き取り調査と物質文化資料の調査をおこなった。

聴き取りに係る話者への質問内容は、おおむね筆者が決め、交易品、交易活動に関する質問を主におこなった。話者は、質問された内容について、自分はもちろんのこと、両親、祖父母、友達、近所の人たち等から聞いた話を含め、知っていることや想像、意見を含め語った。とくに交易品については、日本から展示図録類を数冊持ちこんで、そこに掲載されている蝦夷錦、青玉、金属製飾り等の写真を見せながら質問をおこなった。聴き取り内容は、ICレコーダーで録音するとともに、ビデオカメラでも撮影した。

物質文化資料の調査は、スケールを映し込んでのデジタル一眼レフカメラによる写真撮影をおこなった。主に金属製飾り（現地のことばでヴチ）についておこなった。

(3)サハリン調査の内容整理

①聴き取り調査の翌年度・2011年度、実地調査で得た音声・映像記録をロシア語→日本語翻訳会社に依頼し、内容のテープ起こしを実施した。翻訳会社からは成果品として、日本語版とロシア語版でテキストファイルが納品された。筆者は、このうちの日本語翻訳テキストをベースに、音声ファイルを聞きながら、聴き取りの要旨原稿を作成した。ただし、原文のままでは意味の通らないところや、調査に無関係な会話等も含まれているので、発言の趣旨が大きく変わらないように、順番の入れ替え、ことばの言い換え、内容の補足等の加除修正を行った。以上のような手法で、聴き取り内容の要旨を作成した。これと、聴き取り調査時のメモや記録類、関連情報等を勘案し、調査概報にまとめるための整理作業をおこなった。

②物質文化資料の調査データの整理は、主に真鍮製飾り（ヴチ）の写真の整理をおこない、関連する日本、ロシアの博物館・研究所等の図録・図版と比較しながら形態や用途別に整理作業を行った。

(4)日本の近世文書資料の調査

江戸時代に日本列島北方経由で流入した交易品（とくに「蝦夷錦」「山丹服」等）やサハリン先住民の物質文化資料について、資料が描かれている写本・刊本類の挿絵、画像の調査を主として国立公文書館でおこなった。

(5)ロシア・ハバロフスク、およびコムソモリスク・ナ・アムーレ調査

2013年6月にハバロフスク州郷土博物館、コムソモリスク・ナ・アムーレ芸術博物館を訪問し、館所蔵の中国製絹地を用いた衣服等、ナナイの民族資料に含まれる真鍮製飾りの所在調査をおこなった。

４．研究成果

本研究の目的は、聴き取り調査や物質文化資料の調査により、文献資料だけではわからない交易の事実関係を明らかにし、基礎データの収集をはかることであった。調査研究の結果、大陸とサハリン島の間の住民間の交易活動は、20世紀中ごろまでおこなわれていたことを裏付けることができた。また、19世紀中ごろ以前までおこなわれていた交易活動（いわゆる「サンタン交易」）とは形態の異なる交易であったことも明らかとなった。具体的には、以下の(1)～(3)の成果を得ることができた。

(1)2011年2月に実施したサハリン州・ネクラソフカでの聴き取り調査により、①話者の親や祖父母の代までにおける大陸との交易の事実、②1920～30年代のスターリンによる「大粛清」の影響で、ニヴフたちが所持していた中国渡来の交易品を廃棄したり隠蔽したりしたこと、③交易品の大部分を占める装飾品が女系継承されていたことがわかった。

(2)サハリン州郷土博物館やノグリキ市歴史博物館、あるいはネクラソフカの個人所蔵の真鍮製飾り（ヴチ）の調査と(1)聴き取り調査により、ヴチには十数種類の形態があることがわかり、それぞれに用途や由来等があることもわかった。

(3)2012年6月に実施したハバロフスク調査の結果、ナナイの民族資料に含まれる真鍮製飾りには、サハリン所在の資料ときわめて類似する資料があることがわかった。このことから、アムール川下流域からサハリンにかけて広範に分布していること、その背景に諸民族間の交易活動を想定できることとなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①東俊佑・白石英才、ニヴフの交易活動に係る聴き取りと物質文化資料の調査について－2010年度調査報告－、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第41号、2013、pp.107-146

②東俊佑、近世蝦夷地交易品ノート(1)－17～18世紀アイヌ生産品を中心に－、北方地域の人と環境の関係史、査読無、2013、pp.97-184

③東俊佑、近年の研究動向と古文書から探るアイヌの交易活動、仙台藩白老元陣屋資料館報、査読無、第17号、2012、pp.1-10

６．研究組織

(1)研究代表者

東　俊佑（AZUMA SHUNSUKE）
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：30370224